タイトル：『ファニーたい焼きトム 42 きんぴらごぼう』

【第一幕】

シーン 1：たい焼きトム開店前

（朝のたい焼きトム。トムが厨房で鼻歌まじりに生地を混ぜる。バターのような香ばしさと、小麦粉の優しい香りが漂う。鉄板がジュウジュウと音を立て、店内には甘じょっぱい香りが充満している。）

トム「おお～、今日もファニーなたい焼きを生み出す日だねぇ！生地はしっとりモチモチ、焼くと外はカリッと、パリッと、あの黄金のクリスプネス……！まるで太陽がそのままたい焼きになったみたいだ！」

魚住（ため息）「トムさん、また新作考えたんですか？」

トム「もちろん！ 今日のたい焼きは……ドゥルルルル……（エアドラム）……きんぴらごぼうたい焼きだぁぁ！！！」（キラリと笑う）

魚住「えええええええ！？ ちょ、ちょっと待ってください！ きんぴらってあの、あの、あの甘辛くて、ごま油の香りがガツンとくるあの和食のきんぴらですか！？ シャキシャキして、口の中でジュワッと甘辛さが広がるあの……？」

トム「そうさ！ 和の伝統とたい焼きの融合……まさにジャパニーズ・レボリューション！」

魚住「いやいやいや、革命はいいですけど、たい焼きって普通はアンコとかカスタードとか、甘いやつじゃないと……」

（トム、きんぴらごぼうの鍋を見せる。甘辛いタレがキラキラと光り、ごぼうの

香ばしい香りが湯気とともに漂う。鍋の中で煮詰まったごぼうと人参がつやつやと輝き、胡麻の香ばしい香りがさらに食欲をそそる。）

トム「見ろよ！この艶やかなタレ、まるで金色のシルク！ほら、ごぼうの繊維が絶妙な噛み応えを生み出して、にんじんがちょっぴり甘くて、胡麻が香ばしさを増幅！これをカリッとした生地で包む……考えただけでヨダレ出るねぇ～！！」

魚住「……いや、美味しそうなのは認めます。でも、売れるかどうかは……」

トム「まずは食べてみなきゃ分からないだろ！さあ、いけ！」

（魚住、恐る恐るたい焼きを一口食べる。カリッ。次の瞬間、口の中に広がる甘辛の誘惑……）

魚住「んっ……！？」

（魚住、目を見開き、静止。生地の香ばしさと、きんぴらの甘辛さが渾然一体となる。胡麻の香ばしさが広がり、ごぼうのシャキシャキした食感が心地よく、タレの甘辛さが舌を包み込む。まさに予想を裏切るハーモニー。）

魚住「……意外と、合う……いや、すごく合う！！！ なんですかこれ！？ 外はカリッとしてるのに、中からこの甘辛じゅわ～が出てきて……口の中で和のオーケストラが奏でられてるみたいですよ！！」

（トム、満面の笑み）

トム「だろ！？ じゃあ、今日の目標は……100個！」

魚住「いや、普通のたい焼きでもそんなに売れませんよ！」

【第二幕】

シーン 2: 開店直後の混乱

（たい焼きトムの店が開店。早速お客が並び始める。初めて見る「きんぴらごぼうたい焼き」の文字に、戸惑いながらも興味を示す客たち。）

客 1（サラリーマン）「えっ、たい焼きに……きんぴらごぼう？　いやいや、さすがに……」

客 2（学生）「でも、ちょっと気になるよな……。トムさんの新作って、いつもぶっ飛んでるけど、なんだかんだウマいし。」

客 3（主婦）「ごぼうって、食物繊維たっぷりで体に良いのよね。ヘルシーかしら？」

（トム、満面の笑みで登場し、派手なプレゼンを始める。）

トム「ようこそ！　レディース・アンド・ジェントルメン！今日の主役はこの『きんぴらごぼうたい焼き』だぁぁ！！！」

（トム、たい焼きを割ってみせる。ジュワッと甘辛いタレが滴り、ごぼうの艶が光る。辺りにごま油の香ばしい香りが広がり、お客たちがゴクリと唾を飲む音が響く。）

トム「さあ、このシャキシャキ感！　甘辛のタレがたっぷり絡んだごぼう！外はカリッ！　中はジューシー！　まるで食べるジャパニーズ・ロックンロール！！」

（お客たち、唸る。）

客1「……う、うまそう……」

客2「お、おいくらですか！？」

魚住「1個200円です！」

（次々と売れていくたい焼き。お客たちがその場でかぶりつき、感想を述べ始める。）

客3「んんっ！？ 甘辛いタレが生地に染みて……でも、ちゃんとカリッとしてる！」

客1「ごぼうの風味がじわっと広がる……これは、アリだ！」

トム「HAHAHA！ みんな、ありがとう！！まだまだ焼くよぉ！！」

第3幕：大混乱

シーン5：評判が広がる

場所：『たい焼きトム』店内

店内は相変わらず賑わい、さまざまな客が注文している。魚住はオーダーをさば

きながら、トムの新作に困惑しつつも、何とか持ちこたえようと必死。

魚住：（大きな声でお客に応じながら）「ご注文ありがとうございます！きんぴらごぼうたい焼きですね！」

その様子を見ていた常連客の一人（**お客4**）が、手にしたたい焼きを見つめて驚きの声をあげる。

お客4（外国人観光客）：「えっ、これがたい焼き？ごぼう入り！？ユニークだね！」

トム：（うれしそうに）「そう！ たい焼き界の革命だよ！日本の味を革新するんだ！」

お客4：（少し不安げに）「まあ…いいや、食べてみよう。」

お客がひと口食べると、意外なリアクションが飛び出す。

お客4：「あれ？　これ、美味しい！　ごぼうのシャキシャキ感が意外とマッチしてる！」

トムの顔に大きな満足げな笑みが浮かぶ。

トム：「ほら！言っただろ！　最高のコンビネーションさ！」

その横で、別のお客（**お客5**）が、恐る恐るたい焼きを手に取っている。

お客5（オフィスのおばさん）：「あら、きんぴらごぼう？　これってスイーツじゃないわよね…」

おばさんが一口食べると、すぐに驚いた表情を見せる。

お客5：「うーん…ちょっとしょっぱくない？ 甘いのがいいのに。ごぼうの味が強すぎるわ。」

魚住：（心配しながら）「すみません、お味はいかがですか？」

お客5：「ちょっと期待してたのと違うけど…でも、意外に食べられるわよ。ユニークって感じ。」

そのやり取りを見ていたお客たちが、次々ときんぴらごぼうたい焼きを注文し、評判はあちこちに広がり始める。SNSにも投稿され、さまざまなリアクションが飛び交う。

シーン6：問題発生

場所：『たい焼きトム』店内、昼過ぎ

店内はますます賑やかになり、注文が次々と入る。魚住は忙しさに追われ、目の前でオーダーをこなしている。

魚住：（焦りながらオーダーを取る）「ああ、もう、こんなに多くの注文が！こんな日、初めて！」

その横で、トムはいつものように陽気に材料を準備し続ける。

トム：「これがヒットするって分かってたんだ！きんぴらごぼう、すごいだろ！」

しかし、魚住は気が気でない。

魚住：「でも、少し心配です… きんぴらごぼうたい焼き、好き嫌いが分かれすぎてて…。あまりにもトライアングルな味すぎて…！」

そのとき、別のお客（**お客6**）が来店し、しばらくメニューを見てから質問する。

お客6：「きんぴらごぼう入りたい焼き？そんなの今まで見たことないんだけど、食べてみる価値あるのかな？」

トム：（自信満々で）「もちろん！それこそが芸術なんだ！食べたら分かる！きんぴらごぼうのシャキシャキ感が癖になるよ！」

お客は一口食べると、目を丸くしながら首をかしげる。

お客6：「え…予想以上にごぼうが強い。でも、これってありだな…。なんか、クセになる感じ。」

トムはお客がポジティブな反応を示すと、自信を深め、勢いよく次の注文をさばく。

第4幕：クライマックス

シーン7：評価の真実

場所：店の閉店後、店内

店の営業が終わり、トムと魚住は店内を片付けながら、一日の出来事を振り返っている。

魚住：（疲れきった様子で）「トムさん…今日は本当に予想外のことばかりでした。でも、結局、きんぴらごぼうたい焼きが売れましたね。」

トム：（うれしそうに）「うん、驚いたよ。最初はどうなるかと思ったけど、やっぱり人々は新しいものを試したがるんだ。」

魚住：「でも、評価は賛否両論でしたよね？ きんぴらごぼうが好きな人もいれば、あまりピンとこなかった人もいたし。」

トム：（頷きながら）「その通りだ。でも、それが面白いんだよ。失敗しても挑戦しないと面白くない。きんぴらごぼう、次はもっと工夫してみよう。」

魚住：（微笑みながら）「まあ…トムさんが言うなら、私も協力しますよ。どんな新作が待ってるのか、楽しみです。」

トムが突然目を輝かせ、頭の中で次のアイデアが浮かんだ様子。

トム：「次は、あの食材を使ってみようかな！絶対に驚かせるぞ！」

魚住は驚きながらも笑顔で答える。

魚住：「また変なアイデアを思いついてるんですね…でも、まあ、面白いことになるなら、私は付き合いますよ。」

二人は一緒に店を後にし、店の明かりが消える中、次の冒険が待っていることを予感させる。

第5幕：結末

シーン9：閉店後、きんぴらごぼうたい焼きを食べて味を噛みしめるトム・魚住

場所：『たい焼きトム』店内、閉店後。店内は静まり返り、すっかり片付けが終わったカウンターに座るトムと魚住。テーブルには、昨日残ったきんぴらごぼうたい焼きが二つ置かれている。

（トムと魚住は、それぞれのたい焼きを手に取り、食べる。しばらく無言で味を噛みしめている。）

トム：（一口食べて目を閉じ、味わいながら）

「うん…意外にいいじゃないか、きんぴらごぼう！ こんな味のコンビネーション、誰も考えなかっただろうな。」

魚住：（少ししょっぱい顔で、ゆっくり食べる）

「うーん、まあ、これもアリかも…でも、やっぱり普通のたい焼きが恋しいです…」

トム：（満足そうに）

「次はどんな和食料理にしようかな？ まだまだアイデアが尽きないぜ。」

（魚住がぽつりとつぶやく。）

魚住：（うなだれて）

「次は…普通のたい焼きにしませんか…？ だって、何度も何度も変わりすぎると、お客さんも混乱しますし…。」

（トムは魚住の顔を見て、しばらく沈黙した後、ニヤリと笑う。）

トム：（意気揚々と）

「そうかもしれないけど、やっぱり普通じゃつまらないんだよ！ 世の中、もっと驚きが必要だろう？ みんなが驚いて、口をポカンと開けるくらいのインパクトがないと！ そのために俺がいるんだ！」

魚住：（少し肩を落として、黙ってたい焼きを食べ続ける）

「でも、あまり奇抜すぎると、ついていけなくなっちゃう人がいるかもしれませんよ…。」

トム：（声を少し大きくして、明るく）

「それもまた、楽しみなんだよ！ 変わり続けることで、みんなが気になるんだ！ 次の挑戦、もう決まってるんだ！」

魚住：（しばらく黙った後、ため息をつきながらも少し微笑む）
「でも、また『何これ！？』って言われるんでしょうね…。」

トム：（得意げに笑いながら）
「それが面白いんだろ！さて、次は何に挑戦しょうか…！」

（二人は食べ終わり、静かに店を見回しながら、次の挑戦に胸を膨らませる。）

（エンドロールが流れ始める。陽気なメロディーと共に、店の明かりが消える。）